

鎌倉時代の物語小説
これを見れば、平安朝時一門總て大官人の親に倣ふ代に文章に倣してあるけれども、平安時代の如く、全篇を通じて其の才力名媛がなかつたの語句を加へてある。夫人と、兵衛相次ぎ人心安んぜの煩悶の状と、夫右大将が、夫人の死を悲歎する状を寫したる頗る名文であつて、其主人公の性情は能く描出してある。鎌倉時代の物語小説としては、『山路の落』『松浦宮物語』『地獄草紙』『石清水物語』と、かへば『住吉物語』等があるが文章の流麗等は優るとも決して劣るものではなく、亦實に平安朝の文學に比肩して可なりといひ得るは、其れども惜しいことには、作者が傳はつて居らぬ。鎌倉時代より溯つて、平安朝時代を見ると、漢文學と佛敎との思想が、漸く吾が固有の思想と融合した。そして是等の思想は、主として貴族又は官媛即ち大官人の手に依り文學として現れ、世に廣く普及せし佛敎に依りて、一般人に無常の念を起さしめられたりとも、事は大官人の手に歸したるに平安朝裡に泰平を謳歌し、優にやさしくも花鳥風月を友として風流を事とし、豪華放縱であつたから多くは樂天的文學であつた。けれどもそれは終始一貫されず、畢竟藤原氏と其盛衰と共にし、藤原氏衰へて、政權は武門の手に歸してからは、物語小説も亦衰へた。

鎌倉時代の物語小説
テイ。エム生

今日の日訓
生とし生けるもの、一日として、飲み食ひしないものは、死に等しいものであるから、注が肝要である。
『禍は口より出で、病は口より入る』といふ諺もある。
『布衣から金銭の出入に注意せよ』と、口の出し入れは慎むべきである。

雪の下町點描
新市町の河岸添ひに建つて居る鐵工場雪降る中に、モーター響く。
雪霽れて海けゆる見ゆ砂町の電車終點所人まばらなり。
あけ潮のしたし、満ちつ雪消しし荷舟はおもむろ岸に寄り來る。
おなほのれんをくぐるは唯に今日の雪に駭得たる人の酒をのむらし。
橋上に雪葉つる音聞きこゆとはしるきかも都の雪は。

池頭即興
凍裂噴鳴六六隣
一童投網雪餘晨
聞言欲慰病中母
今見玉祥有替人

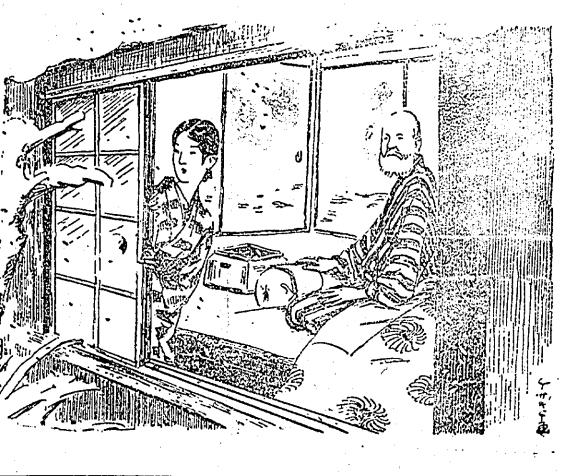
躍進日本を讀ふ
皇紀二千五百九十七年の年頭に立つて、遠き昔を憶ふ。
皇紀二千五百九十七年の年頭に立つて、遠き昔を憶ふ。
皇紀二千五百九十七年の年頭に立つて、遠き昔を憶ふ。

不忠
皇紀二千五百九十七年の年頭に立つて、遠き昔を憶ふ。
皇紀二千五百九十七年の年頭に立つて、遠き昔を憶ふ。

友部株式會社
株一様ヨリ、債券ニ枚ヲ買取シマス。
平町三丁目
電話一七七七番

高橋是清
松浦泉三郎作
佐々木今朝吉書

第一日の結果は民政黨に断然長く、政友會に甚だしく不結果だつた。が、或る開票の顛末を窺ひ、政友會は最後の快勝を夢見て樂觀態度を示してゐた。
然しその第二日目、その結果を確定的に豫想し得る北海道各區を除いての全圖北落者數が明かにされた。
當日の各新聞夕刊には投票票所に於ける岡田首相以下各關係の寫眞と共に赤く



民政黨二百五に對しては、確かに御期待に添ふ良品廉價の。
芳織田材木商店
電話 平四六〇番

吉田眼科醫院
醫學士 吉田久雄
平町紺屋町 電話六八番

食味美しく、秋となりました。
百粒のすゝむ
今迄の間に弱つて胃腸病の方が涼しくなると俄に澤山食過ぎてお腹を害したらスグキ、メの早い
靈効散
を御試し下さい

胃腸病。心臓病。腰。痔。滴應藥
三年、五年と患ふ慢性胃腸病が全快した人が澤山あります。御望みの方には見本薬一日分を差上りますから御遠慮なく御來局下さい。
平町古鍛冶町縣社ノ下
處方箋調劑所 阿康藥局
電話 四四三番

内 外 建築材 刃阿部材木店
築具材 阿部好利
電話 四九四番

精神科 腦脊髓病科 神經病科
郡山縣立代用精神病院
郡山市外大槻村針生
電話 九二五番

銘木(床ノ間材) 天井板、ベニヤ板買ふなら
確かに御期待に添ふ良品廉價の
芳織田材木商店
電話 平四六〇番

吉田眼科醫院
醫學士 吉田久雄
平町紺屋町 電話六八番

高久病院
醫學士 高久清忠
電話 五三三番

阿康藥局
電話 四四三番

日本石油株式會社特約店
關影商店平支店
電話 六一番

鐵道省指定記念
小名濱...湯本間乘合
自動車無料乗車券サレビス

根本産科醫院
平町南町五二
電話 三四番

根本産科醫院
平町南町五二
電話 三四番

桑原柔道整骨院
電話 六七四

釜屋商店
電話 九九番

釜屋商店
電話 九九番

豪華なサロン
御同伴で御商談
電話 一〇三番

西村屋藥舖
電話 三三番

西村屋藥舖
電話 三三番

